

『七一雑報』創刊号の振り仮名

相ヶ瀬 千 草

桜美林大学リベラルアーツ学群

The furigana of the first issue of "Shichi Ichi Zappo"

AIGASE Chigusa

College of Arts and Sciences, J. F. Oberlin University

キーワード：振り仮名、キリスト教、新聞、明治期

はじめに

『七一雑報』とは日本キリスト教界初の週刊紙である。近代日本におけるキリスト教伝道や社会教育などの面や、本紙を雑誌・新聞いずれに位置づけても言文一致化現象の早いものであるとし、その歴史的価値を指摘した山本 [1965] のように文体面から研究が行なわれている。表記面においては明治期の新聞・雑誌、その他刊行物と同様に、『七一雑報』もほとんどの漢字に振り仮名がふられているが、神学思想との関連で「真神」に「カミ」と「まことのかみ」の二つの振り仮名が付けられていることを挙げ、「真」の字を付け加えている点を興味深いとする部分的な記述にとどまっている¹⁾。本稿では『七一雑報』創刊号の漢字表記に着目し、振り仮名の付け方の整理を試みる。

1. 『七一雑報』概要

『七一雑報』は1875(明治8)年に12月27日に神戸の雑報社より創刊された²⁾。創刊1年目の1～52号には巻次がなく、2年目の通巻53号を2巻1号として、以降1883(明治16)年6月26日付の8巻25号(通巻389号)まで刊行、廃刊後は主要編集者の変更もなく『福音新報』に引き継がれるが、これも1886(明治19)年には日本初の日刊キリスト教新聞となる『太平新報』に吸収される形で廃刊となる。判型は現在のA4版とほぼ同規格の縦29.7cm×横21cm、紙数ははじめ4枚から8枚に倍増し(1巻27号)、のち再び4枚に戻る(8巻23号)。価格は2銭前後を推移し、新聞社・書肆のほか薬局などの異

業種や駅の待合所でも販売された。京阪神、特に大阪における販売所数が目立って多く、また東京・名古屋といった都市部や宣教活動の活発な横浜などにも取次拠点を設けていることから、全国規模の文書伝道を目指していたと推察される。

『七一雑報』という名称は「七日に一回発行される種々雑多な報道 (笠原 [1986] 34 頁)」を意味する。その名が示すとおり週刊新聞で、創刊号「口上」においても週1回の刊行を宣言している。

私^{わたくし}此^{この}度^{たび}七一^{ごちゅういち}雑^{ざつ}報^{ほう}といふ^{いふ}新^{しん}聞^{ぶん}を^を出^{しゅつ}版^{ばん}せんと^{せんと}志^{こころ}ざ^ざせしに、^に既^{すで}に^に官^{くわん}許^{きょ}を得^えたれば、^{いま}今^{こころ}、試^しみに^に第^{だい}一^{ごう}号^{ごう}を^を刷^{さい}行^{こう}し、^{だい}第^{ごう}二^{ごう}号^{ごう}第^{だい}よ^よりは^は年^{とし}を^を改^{あら}た^ため^め第^{だい}一^{ごう}月^{げつ}中^{ちゅう}旬^{じゆん}を^を始^{はじ}めとし、^{まい}毎^{まい}週^{しゅう}一^{いつ}度^ど出^{しゅつ}版^{ばん}致^{いた}し、^{ひろ}廣^{ひろ}く^{もろ}諸^{もろ}人^{びと}の^も求^{もと}め^もに^そ備^{そな}へん^{へん}こ^こと^をを^を冀^{こい}ふ。^な(1 卷^{くわん}1 号^{ごう}・口^{くち}上^{じやう} 4 頁^{へい})³⁾

同「論説」では、編集方針を述べる。

此^{この}新^{しん}聞^{ぶん}紙^しには^は外^{ほか}、^な成^なる^る丈^{たけ}解^{わか}り^りよ^よく^く平^{ひら}たい^{たい}語^ごで^で先^{せん}生^{せい}方^{かた}の^の高^{たか}談^{だん}や^や世^よの^の人^{ひと}の^の為^{ため}になる^るこ^こと^をを^をか^かき、^{いろ}いろ^は四^し十^{じゅう}八^{はち}文^{もん}字^じさ^さへ^へ知^して^てい^いれ^れば^ば後^{あと}は^は読^よみ^みて^てかん^{かん}か^かへ^へに^にて^て解^{わか}る^るや^やう^うに^に致^{いた}しま^ます^す趣^{しゅ}向^{こう}故^こ、^む向^{こう}裏^りの^の七^{しち}兵^{べい}衛^{ゑい}さん^{さん}でも^も隣^{となり}町^{ちやう}の^の八^{はち}兵^{べい}衛^{ゑい}さん^{さん}でも^もお^お松^{まつ}さん^{さん}でも^もお^お竹^{たけ}さん^{さん}でも^も亦^{また}は^は僻^{へん}ひ^ひの^の百^{ひゃく}姓^{せう}衆^{しゅう}でも、^{この}此^{しん}新^{ぶん}聞^しを^をよ^よんで^で開^{くわい}化^{くわ}の^の仲^な間^ま入^りを^をな^なさ^さる^る様^{やう}に^にお^お頼^{たの}み^み申^ます^す(1 卷^{くわん}1 号^{ごう}・論^{ろん}説^{せつ} 1-2 頁^{へい})

「いろは四十八文字さへ知ていれば」記事内容が理解できるよう、「解りよく平たい語」を選び用いるとの方針が示されている。この方針に沿って、活字は漢字・カタカナ・ひらがなまじりの楷書体でほぼすべての漢字に振り仮名をふっている。

また「此新聞しをよんで開化の仲間入をなさる様に」とあることから日本人読者の啓蒙が刊行目的のひとつとされ、そのため刊行初期はキリスト教関連の記事よりも西欧の工業技術や教育事業の紹介、衛生指導などの記事を多く掲載する。

2. 『七一雑報』の振り仮名

本稿では『七一雑報』創刊号(1875年12月27日付、第1巻第1号)から抽出した漢字表記語の振り仮名を、仮名遣いと表現から整理する。

(1) 振り仮名の仮名遣い

漢字「病」に対して「やまい」「やまる」のように、仮名遣いが固定されず複数の振り仮名が付されているものがある。この現象は、イ音「い・ゐ」、ウ音「う・ふ」、エ音「へ・ゑ」、オ音「お・を」、ワ音「わ・は」に見られる。主な例を以下に挙げる。

〈い・ゐ〉

云う：いゝたる／ゐふもの／いう	至る：いたつて／ゐたる
一般：いつぱん／ゐつぱん	犬：いぬ／ゐぬ
遂に：つい-に ⁴⁾ ／つゐ-に	先生：せんせい／せんせいゐがた
今：いま／ゐま	出す：いだ-して／ゐだ-す

〈へ・ゑ〉

智慧：ちへ／ちゑ 心得：こゝろへ／こゝろゑ

〈お・を〉

落とす：おと-し／をと-せしか	恐れ：おそ-るる／をそ-れ
驚き：おど-ろき／をど-ろき	自ずから：おのづ-から／をのづ-から
己：おのれ／をの-れ	思う：おも-ひ／をも-ひ

〈は・わ〉

器：うつは／うつわ⁵⁾

このほか「方：はう／ほう」「箇条：かぜう／かどう」「養生：やうしやう／ようしよう」など新旧仮名遣いが混在する例が散見される。このような仮名遣いの混同は、進藤 [1965] の1877～1878（明治10～11）年の郵便報知新聞の語彙調査においても報告された、明治初期の新聞・一般刊行物に見られる様相である。ただし、郵便報知新聞の用例には「『い』を用いるべきかなづかいは、語頭が『い』で始まる語は『ゐ』と書かれた例がない（進藤 [1965] 7頁）」が、『七一雑報』では「ゐふ（云う）」「ゐぬ（犬）」「ゐつぱん（一般）」のように、語頭に「ゐ」を用いた例が見られる。

(2) 振り仮名の分類

振り仮名は、字音・字訓に則したものと、その漢字の音訓によらず熟語の意味を意識した読みを当ててるものとに大別できる。

①字音・字訓読み

漢字の音訓に従った読み方を示す、最も基本的な振り仮名である。

土中：どちう	製造：せいぞう	下落：けらく	国王：こくわう
小川：をがわ	砂：すな	幾度：いくたび	用ゐたる：もち-ゐたる

訓読みでは送り仮名が一定しない語が見られる。

雖も…雖とも [いへ-ども] 雖も [いへと-も]

怠る…怠たらざる [をこ-たらざる] 怠る [おこた-る]
 冀う…冀ねがはず [こい-ねがはず] /冀がう [こいね-がう] /冀ふ [こいねが
 -ふ]

濁音符・半濁音符の使用は不規則で、同一記事に複数回使用される語においても符号の有無が一定しない場合がある。

続く：つづく／つ、く 情欲：じやうよく／しやうよく
 日本：につほん／につぼん

②意識的振り仮名

熟語を構成する個々の漢字の音訓によらず、熟語の意味を読みとして当てる。類義語・類義表現の読みを振り仮名とする。

i) 類義語 (字音語) を宛てる

熟語の意味と類似する音読みの語を振り仮名として用いる。

全体：からだじう [体中]	機械：とをぐ [道具]
普通：つうれみ [通例]	健康：じやうぶ [丈夫]
智脳：ちへ [知恵]	要用：たいせつ [大切]
治療：りようじ [療治]	各々：めいめい [銘々]
一層：かくべつ [格別]	十分：たくさん [沢山]
文章：もんく [文句]	純粹：ほんとう [本当]
商業法：しょうばゐほう [商売法]	

ii) 類義語 (字訓語) を宛てる

熟語の意味と類似する訓読みの語を振り仮名として用いる。熟語に対して和語の振り仮名を振る例は、熟語に対して漢語の振り仮名を振る (i) を上回る。

振り仮名のパターンは、

- ・「両親」を「ふたおや」、「平均」を「おしならす」のように、熟語の意味に相当する和語を宛てる。

「かねもち」「まごころ」のようにひとつの読みが複数の熟語の振り仮名に用いられることもある。

- ・「要旨」を「かなめ」、「標目」を「しるし」、「生命」を「いのち」、「戸外」を「そと」と読むように、熟語を構成する漢字1字の訓読みを熟語全体の読みとする。

両親：ふたおや [二親]	布告書：ふれがき [触書]
道理：わけ [訳]	童子：こども [子供]
武者：つわもの [兵]	貴重：たつとき-もの [尊きもの]
真誠：まことに [真に・誠に]	平均：をしならし-たら [押し均す]

朋友：ともだち [友達]	成年：をとな [大人]
衣服：きもの [着物]	僻野：いなか [田舎]
熱心：はげみ [励み]	皮膚：はたへ [肌]
語：ことば [言葉]	障害：さまたける [妨げる]
論説：はなし [話]	夜半：よなか [夜中]
面色：かをいろ [顔色]	胃中：はら [腹]
要旨：かなめ [要]	標目：しるし [印、標し]
生命：いのち [命]	身体：からだ [体]
試験：ためし [試し]	奨励：すゝめて [奨めて]
戸外：そと [外]	贏餘：あまり [余り]
金満家・富人・富貴：かねもち [金持ち]	
赤心・愛心：まごゝろ [真心]	

iii) 類似表現を宛てる

熟語の意味を短い句で言い換え、振り仮名とする。

- 精錬：よくきたへーたる [よく鍛えーたる]
- 不消化：こなれにくーく
- 適宜：よきほど [良き程]
- 当時：そのころ、このせつ
- 満腹：はらいつはい [腹一杯]
- 一室：ちいさきひとま [小さき一間]
- 宣教師：みちをおしゆるもの [道を教ゆる者]

おわりに

本稿では『七一雑報』創刊号から抽出した漢字表記語の振り仮名について、仮名遣いと表現から整理を試み、以下の2点を確認した。

- ①同時期の新聞・一般刊行物と同様「い」と「ゐ」、「お」と「を」などの書き分けに乱れが確認でき、仮名遣いに規範からの逸脱が見られる。
- ②振り仮名には、熟語の音訓に基づく読みを示すものに加え、熟語を構成する個々の漢字の音訓によらずに語の意味を振り仮名に宛てる用法が見られる。これらは同時期の新聞・一般刊行物の振り仮名にも共通する特徴である。

熟語の意味を宛てる意識的振り仮名は近世小説などにも現れる用法であり、『七一雑報』の振り仮名は従来の用法を引き続き活用しているといえる。一方で「い・ゐ」「お・を」など異表記形を持つ音は歴史的仮名遣いから外れた表記も用いられるようになっている。

今回の調査では『七一雑報』創刊号の振り仮名の類別を試みるにとどまり、イ音・オ音

等の仮名遣いの混同に関して、『郵便報知新聞』ほかではイ音の語頭表記は専ら「い」であるのに対し、『七一雑報』では「い」と共に「ゐ」も用いられることについては検討が及ばなかった。今後は、記事内容によって振り仮名の傾向に違いが現れるのか、同音の仮名の混同にさらに変化が生じるのか、分類方法の妥当性の検討も含め『七一雑報』の振り仮名の分析を進めていきたい。

注

- 1) 藤代泰三 [1986] 『『七一雑報』(1875～1879)における神学思想の一考察——キリスト教と文化——』同志社大学人文科学研究所編『『七一雑報』の研究』同朋舎 83-96頁
- 2) 創刊号奥付に記載された「社長兼印刷」は今村謙吉、「編輯長」は村上俊吉だが、実際に指揮をとったのは、当時神戸で宣教活動を行っていたアメリカン・ボードの宣教師 O.H. ギューリック (Orramel Hinkly Gulick) である。ギューリックの名を前面に出さず日本人名義としたのは、1875(明治8)年6月の新聞紙条例によって、外国人による新聞発行が禁じられていたためである。
- 3) 『七一雑報』本文引用に際し、漢字の旧字体は新字体に、変体仮名は現行仮名に改めた。また原文には句読点が使用されていないため、引用にあたり適宜補った。
- 4) ハイフン以降は送り仮名。
- 5) 「は・わ」混同例は創刊号では1例のみだが、2号以降に「福：さいはい／さいわい」が見える。

参考文献

- 笠原芳光 [1986] 「週刊紙としての『七一雑報』」同志社大学人文科学研究所編『『七一雑報』の研究』同朋舎 23-49頁
- 田島優 [1998] 『近代漢字表記語の研究』和泉書院
- 同志社大学図書館蔵 [1988] 『七一雑報<復刻版>』第1巻 不二出版
- 山口光朝解説 [1988] 『七一雑報 解説・総目次・索引』不二出版
- 山本正秀 [1965] 『近代文体発生の史的研究』岩波書店
- 国立国語研究所編 [1959] 『明治初期の新聞の用語』国立国語研究所報告15 秀英出版 https://repository.ninjal.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1244&item_no=1&page_id=13&block_id=21 (2022年1月11日現在)
- 進藤咲子 [1965] 「明治初期のかなづかいの様相」『ことばの研究』2 国立国語研究所論集2 秀英出版 121-142頁 https://repository.ninjal.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1754&item_no=1&page_id=13&block_id=21 (2022年1月11日現在)